

ガズナ朝のナディーム

稻葉 穰

モンゴル時代以前の東方イスラーム世界に成立した諸王朝においては、その宮廷を構成する重要な要素として、ハージブやカーティブ(ダビール)と並んで、君主の側近くに仕え、酒宴や遊興の相手を務めるナディームと呼ばれる人々の存在を擧げることができるであろう。ハージブやカーティブがそれぞれ軍や官僚組織と直接結び附く存在として捉えられているのに比して、ナディームはこれまで主に、アダブ文學や統治論的著作から明らかになるいわば理想のナディーム像に基づきつつ、サロン文學や宮廷におけるアダブの問題といった、いわば文化面において語られてきている。しかしながら、一一世紀に書かれた史料である *Tarikh-i Bayhaqi* に見られる、ガズナ朝の第五代スルタン・マスウード時代(一〇三〇—一〇四〇年)のナディームの姿は、決して君主の遊び相手、飲み相手に留まるものではないように見える。彼らは様々な形で宮廷内部の権力争いに参加し、あるいはナディームから重要な役職に任じられる者もいるなど、その果たした役割も決して一様なものではなかった。今回の発表では、主に *Tarikh-i Bayhaqi* の記述に基づき、ガズナ朝の宮廷におけるナディームの實際の姿を明らかにすることを試みたい。それは、宮廷というものの實像を知る上での一つの手がかりとなるはずである。

ペルシア語譯『王叔和脉訣』とラシードウ・ウッディーン

羽田 亨 一

『歴史集成 *Jam'e al-Tawarix*』の編著者として有名なラシードウ・ウッディーン *Rasid al-Din Fazl Allah b. 'Emad al-Doule Abu al-Xeir al-Hamadani* (一二四七頃—一二三八) は中國文化に多大の関心を抱き、*‘Tanksiq-i name-ye Il-xan dar fortune solime Xazir-i Il-xan* に捧げる支那の諸科學に關する珍貴な書物¹⁾と題する中國の脈學、鍼灸、本草、法制に關する漢籍四點のペルシア語譯本叢書の作成を企てた。そのうち現存するのは脈書の譯本のみである。

原典の本文(韻文)および注部分の書名、人名、醫學用語を、ペルシア語にない中國語音を表すための特別な符號を加えたペルシア字母で音寫した本書は、イラン文化、醫學史研究のみならず當時の中國語の音韻研究にとつても重要な資料であるが、未だ本格的な研究はなされていない。本書の内容の正確な理解のためにも、また本書が翻譯書である點から見ても、先ず中國語原典を確定する必要がある。

原典が *Wank Sw-xw* (王叔和) の *“May krine”* (『脉訣』) であることは本書の數か所に明記されている。しかし『王叔和脉訣』數種と照合したところ、その本文は何れも殆ど一致するが、註の部分が一致するものはなかった。武田科學振興財團「杏雨書屋」藏

『纂圖方論詠訣集成』と比較した結果、原典は李嗣(希范)著『集解詠訣』一二巻であろうというのが發表者の現在の見解である。

リッダ(イスラームからの離脱) 考

後 藤 明

六三二年、アラビアのメディナで、唯一神(アッラー)への信仰と服従を説いていたムハンマドが死去した。私見によれば、ムハンマドは「神の使徒」という資格で、自分の政治的判斷や戰爭の指揮に従うように人々に求めていた。彼は同時に自分は「預言者」でもあると自覺していたのであるが、「預言者」とは人々に「従うこと」を求める立場とは考えていなかったと思われる。いずれにせよ彼は、アラビアのほぼ全領域で、自分の權威を確立した。しかし、ムハンマドにとっての「眞の信徒」とは、『コーラン』の文言によれば、「神の道に移住し、神の道で戦う」人々だけであつた。そして、そのような「眞の信徒」は、メディナだけにいたのである。

ムハンマドの死後、「眞の信徒」たちは彼らだけで「神の使徒の後継者(カリフ)」を選出して、ムハンマドなきあともメディナが一つの社會でありつづけることを外部に示した。ムハンマドが「神の使徒」であり「預言者」であることを認め、彼や彼の代理人に「サダカ」を支拂っていた外部のさまざまな集團は、彼の後継者には「サダカ」の支拂を拒否した。新たに「カリフ」を「長」にいただいたメディナ社會は、そのことを「イスラームからの離脱(リッダ)」

ととらえ、そのような集團と戦つた。

メディナ社會との戦いに際し、メディナ外部のさまざまな集團はより大きな集團にまとまろうとした。そのとき、いくつかの場合には、人々は「預言者」を指導者とした。後世のムスリムの歴史敘述は、そのような「預言者」を「嘘つき」とよんでいる。

以上のことは、この分野を研究している研究者にとっては自明のことである。本發表では、限られた資料のなかの指導者の立場・資格を表現している用語に注意を拂つて、その資料を再吟味する。結論は、自明の事實の再確認である。

世界金本位制と中國の銀貨經濟

中 村 哲 夫

經濟史學の範疇から歐米と中國との相剋を論ずると、世界金本位制との關係に還元できる。兩者の關係を圖式化すると、つぎの三つの時期に區分される。第一ラウンドでは、中國は「強者」の地位をえ、A・スミスをして「世界で最も富める國」と言わしめる。この時代に、新大陸の銀生産の霸者であるスペインが没落、ヨーロッパでは金との交換における銀貨の低落、中國からの金の流出という特徴的な事態が進行する。第二ラウンドは、イギリスが産業革命の成功を背景に金本位制度を掲げ、イングランド銀行の世界銀行化へと向かう。その間、中國では國內での銀價格の高騰という世界經濟循環とは逆の方向が加速する。しかし、中國はまだ「對抗者」の位置